

聖霊降臨後第16主日特定20（9月24日の聖書箇所）

I 第一朗読（ヨナ書3章10節―4章11節）

10 神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくださずのをやめられた

1 ヨナにとつて、このことは大いに不満であり、彼は怒った。2 彼は、主に訴えた。

「ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりはありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かつて逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。3 主よどうか今、わたしの命を取ってください。生きていますよりも死ぬ方がましです。」

4 主は言われた。

「お前は怒るが、それは正しいことか。」

5 そこで、ヨナは都を出て東の方に座り込んだ。そして、そこに小屋を建て、日射しを避けてその中に座り、都に何が起るかを見届けようとした。

6 すると、主なる神は彼の苦痛を救うため、とうごまの木に命じて芽を出させられた。とうごまの木は伸びてヨナよりも丈が高くなり、頭の上に陰をつくったので、ヨナの不満は消え、このとうごまの木を大いに喜んだ。7 ところが翌日の明け方、神は虫に命じて木に登らせ、とうごまの木を食い荒らさせられたので木は枯れてしまった。8 日が昇ると、神は今度は焼けつくような東風に吹きつけるよう命じられた。太陽もヨナの頭上に照りつけたので、ヨナはぐったりとなり、死ぬことを願って言った。

「生きていますよりも、死ぬ方がましです。」

9 神はヨナに言われた。

「お前はとうごまの木のことと怒るが、それは正しいことか。」

彼は言った。

「もちろんです。怒りのあまり死にたいくらいです。」

10 すると、主はこう言われた。「お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。11 それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。」

II 第二朗読（フィリピの信徒への手紙1章21―28節）

21 わたしにとつて、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです。22 けれども、肉において生き続けられ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。23 この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。24 だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。25 こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。26 そうなれば、わたしが再びあなたがたのものに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇りは、わたしゆえに増し加わることとなります。

27 ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。そうすれば、そちらに行つてあなたがたに会うにしても、離れているにしても、わたしは次のことを聞けるでしょう。あなたがたは一つの霊によつてしっかりと立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦つており、28 いろんなことがあつても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。このことは、反対者たちに、彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示すものです。これは神によることです。

1 「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。2 主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。3 また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、4 『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。5 それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。6 五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、7 彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。

8 夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。9 そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。10 最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。11 それで、受け取ると、主人に不平を言った。12 『最後に来たこの連中は、一時間しか働きましたがませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中と同じ扱いにするとは。』13 主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。14 自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。15 自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』16 このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

語句の解説

1 節「次のようにたとえられる」。直訳「似ている」。原文を直訳すれば、「天の国はある一家の主人に似ている」となるが、この意味は天の国がそのままそっくり「ある一家の主人」と等しいということではなく、この主人の行動の仕方が天の国と共通する特徴を持っているということである。▼「夜明

- 1 似て いる 天の国は ある 一家の主人に
その者は 出て行った 直ちに 朝早く
雇うために 労働者たちを 彼のぶどう園の中に。
- 2 一致して 労働者たちと一デナリオンで 一日につき
彼は送った 彼らを 彼のぶどう園の中に。
- 3 そして 出て行って 第三の時刻頃
彼は見た 他の者たちが
立っているのを 広場の中で 仕事のないまま。
- 4 そして その者たちに 彼は言った、
「行きなさい あなたがたも ぶどう園の中に、
そして 何であれ正義を 私は与えるだろう あなたがたに。」
- 5 彼らは 出かけた。
再び 出て行って 第六と第九の時刻頃
彼はおこなった 同じように。
- 6 だが 第十一の頃 出て行って
彼は見つけた 他の者たちが 立っているのを
そして 彼は言う 彼らに、
「なぜ ここに あなたがたは立っているのか
一日中 仕事のないまま。」
- 7 彼らは言う 彼に、「というのは 誰も 我々を 雇わなかった。
彼は言う 彼らに、「行きなさい あなたがたも ぶどう園の中へ。」
- 8 夕方になって、 言う ぶどう園の主人は 彼の監督に、
「呼びなさい 労働者たちを、 そして 払いなさい 彼らに 賃金を、
始めて 最後の者たちから 最初の者たちまで。」
- 9 そして来て 第十二の時刻頃の者たちが 受け取った 一デナリオンずつ。
そして来て 最初の者たちは 思った 次のことを
より多くを 彼らが受け取るだろう。
- 10 そして 受け取った 一デナリオンずつ 彼らも。
11 だが受け取って 彼らはずぶやいた 一家の主人に向かって
12 言いつつ、「これらの 最後の者たちは 一時間を 働いた、
そして 等しく 我々と 彼らを あなたはおこなった
耐えた者たちと 一日の重さを、そして 炎暑を。」
- 13 だが彼は 答えて 彼らの一人に 言った、
「友よ、 私は不正義をしていない あなたに。
ではないか 一デナリオンで あなたは一致した 私と
取りなさい あなたのものを、そして 行きなさい。
だが私は望む この最後の者に 与えることを あなたにのよめに。
私に許されないのか 私が望むことをおこなうことは 私のものでは、
あるいは あなたの目が 悪く あるのか、
あるいは 私 が 善く ある。」
- 16 このように あるだろう 最後の者たちは 最初で
そして 最初の者たちは 最後で。

けに」。直訳「直ちに 朝早く」。朝の六時頃が一日の始まりになる。この六時頃を起点として一日の時刻が数えられる。▼「雇うために」。ぶどうの収穫は霜が降りる前に終わらせねばならないので、最後は時間との戦いとなり、一人でも多くの労働者を確保することが必要である。

2節「一デナリオンの約束で」。直訳「一致して……一デナリオんで」。動詞「一致して」はシムフオーネオーの分詞形だが、この動詞は接頭辞シュン（一緒に）とフォーネオー（声を出す）との合成語。労働者と雇い主とが賃金をめぐって交渉し、両者の声が一致したところが「一デナリオン」だったのである。一デナリオンは労働者の一日分の平均賃金だが、このたとえ話によれば、炎暑の中の十二時間労働に対する賃金になる。

3節「九時ごろ」。直訳「第三の時刻頃」。朝の六時頃から夕方の六時頃までを十二等分する教え方に従っている。だから、第三の時刻といえ、朝の九時になる。▼「何もしないで」。直訳「仕事のないまま」。この語アルゴスは、否定辞ア（ない）とエルゴス（働いて）の合成語だから、「働きのない・仕事のない」状態を表す。仕事のない状態は人間にとって好ましいことではない。

4節「ふさわしい賃金を」。直訳「何であれ正義を」。この句に含まれる言葉「正義」は、形容詞ディカイオス（正しい・公正な）だが、13節の「不当なことはしていない」はこの語と同じ語根の動詞である。朝の九時以降に雇われた労働者が主人のこの言葉を聞いたとき、一デナリオンより少ない賃金を考えたに違いない。それが人間の考える「正義（ふさわしい賃金）」だから。

5節「十二時」と三時ごろ」。直訳「第六と第九の時刻頃」。朝六時から数えた「第六」と「第九」の時間のこと。初代教会にとって、第三と第六と第九は特別の意味を持った時刻である。しかし、この箇所のような背景があるかどうかは確かではない。

6節「五時ごろ」。直訳「第十一の頃」。朝六時から数えて「第十一」番目の時刻だから、夕方の五時になる。この労働者は12節から分かるように、六時までの、一時間しか働いていない。▼「なぜ、何もしないで一日中ここに」。直訳「なぜ ここに …… 一日中 仕事のないまま」。一日中、仕事のないまま、「ここに」立っていることは、あつてはならないおかしなことなのである。

8節「払ってやりなさい」。労賃はその日のうちに支払うのが律法の定めであった（申二四15、レビ九13）。▼「最後に来た者から始めて」。直訳「始めて 最後の者たちから」。支払いを最後の者から始めたと描写することによって、常識を越えた主人の態度が浮き彫りにされる。最初の者が期待に胸を膨らませるのは当然であり、どのような結末になるのか、聞き手の興味を引きつけることになる。いずれにしても、8節以降、物語の焦点は最初と最後の労働者に対する主人の態度に集中している。

11節「不平を言った」。直訳「つぶやいていた」。この語は「つぶつぶ不平を言う」というだけでなく、「不平をぶつける相手がある役割に不適切な人物であることを表明する」といった強い意味で使われることもある。そうであれば、十二時間働いた者と一時間しか働かなかった者とを同等に扱うような主人は、雇い手として不適格だと考えていることになる。

12節「まる一日、暑い中を辛抱して働いたわしたち」。直訳「一日の重さを、そして炎暑を耐えた者たちと」。直訳が「耐えた者たち」と訳した語は動詞バスタゾーの分詞形。この語は重荷を「運ぶ」ことを表すが、ここでは「耐える」の意味。この分詞形は前の「我々と」にかかっているので、「耐えた者たち」と直訳した。「炎暑」はただの暑さではなく、東から吹き上げる熱風のことを表しているのかも知れない。猛暑の中で仕事を行うのは重荷を運ぶような忍耐を必要とする。

13節「友よ」。この語（ヘタイロス）は新約聖書ではマタイが三度使うだけ。二二12では、礼服を着ないで婚宴に参加した者への呼びかけとして、また二六50では、イエスを逮捕するために接近したユダへの呼びかけとして使われている。賛成できない態度を取る相手であっても、親しみを込めて声をかけるときは呼びかけなのかも知れない。ここでつぶやいたのは複数の人たちだが、主人はグループとして彼らを扱わずに、その一人に「友よ」と呼びかけて、自分の態度を弁明している。神は敵対者の一人ひとり的大事にし、「友よ」と呼びかける。▼「不当なことはしていない」。直訳「私は不正義をしていない」。この語は4節の「正義で」と同根の動詞。

15節「ねたむのか」。直訳「あなたの目が悪くあるのか」。「悪い目」とはねたみの目を表す。主人の善

良さにねたみを起こして、目の悪くなった者は、主人の心が分からなくなる。

①この福音の直前で(一九23-30)、イエスは「金持ちが天の国に入るのには難しい」と語り始め、「しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる」と結んでいる。この結びはこの箇所の結びとほぼ同じである。このことから考え、一九23-30とこの箇所は内容的に関連することを述べているだろう。一九23-30の構成に注目すると

- a はつきり言っておく。金持ちが天の国に入るのは難しい (23-24節)
- b 誰が救われるのか (25節)
- c 神は何でもできる (26節)
- b 何をいただけるのか (27節)
- a 私の名のために一切を捨てた者が永遠の命を得る (28-29節)

となるから、「神は何でもできる」ということを土台として、主張が繰り返り広げられている。この「神は何でもできる」という確信は、この箇所とも何らかに関連していると思われる。

第一段落 (1-7節)

この段落では、朝早く広場で労働者を雇用する様子を総括的に述べた後で(1-2節)、「第三の時刻頃」から「第十一の頃」にかけて行われた四回もの求人活動を描いている(3-7節)。この3-7節は「仕事のないまま立っている」と「あなたがたもぶどう園に行きなさい」によって困り込まれている。この困り込みから分かるように、合計五回にわたる求人活動は、労働力の確保のためだけでなく、むしろ、人が一日中「仕事のないまま立っている」のは好ましいことではないからである。労働は賃金を獲得する手段でもあるが、人間が人間であるために不可欠な活動でもある。

第二段落 (8-16節)

この段落に登場する労働者は最初と最後に雇われた労働者だけで、その間に雇われた労働者はまったく姿を見せない。「最後の者たち」と「最初の者たち」に対する恵みの対比に重点が置かれている。この段落で注目すべきことは13-15節の主人の弁明である。この弁明の文章構成に注目すると、

- 私は不正義をしていない 否定文
- ではないか 疑問文
- 取りなさい 命令文
- だが私は望む 肯定文
- 許されないのか 疑問文
- 悪くあるのか 疑問文

となっている。「私は不正義をしていない」と「だが私は望む」とが骨格を作り上げ、そのうち「だが私は望む」に中心的な主張があるのは明らかである。最後の者にも同じようにしたのは主人が「望んだ」からであり、主人は自由裁量権を持っているからである。「何でもできる」神は罪人にも命を与えようと「望む」方なのである。

②何もしないで立っていた(1-7節)

ぶどう園の主人は夜明けとともに広場に出て行き、労働者を雇う。もし収穫の時期であれば、一人でも多くの労働者が必要とする。霜の降る前に、収穫を終わらさねばならないからである。主人は九時頃にも、十二時と三時頃にも、さらに五時頃にも出て行き、人を雇ってぶどう園へ送っている。

最初に雇った労働者には「一デナリオン」の賃金を約束し、九時頃に雇った労働者には「ふさわしい賃金」(直訳「何であれ正義を」)を約束したが、最後に雇われた労働者には「あなたがたもぶどう園に行きなさい」と述べるだけで、賃金についてはひとことも触れていない。九時頃に雇われた労働者は「ふさわしい賃金」と聞いて、遅れて働き始めた分を一デナリオンか

ら差し引いた賃金を考えたにちがいない。そうであればなおさらのこと、五時に雇われた労働者は一デナリオンよりはるかに少ない賃金を考えたに違いない。

それでもどう園に行つたのは、「何もしないで」(直訳「仕事のないまま」)広場に立っていることよりは良いことだからだ。その良さは賃金が手に入るだけでない。むしろ、働けるということは人間が人間らしく生きるために不可欠なことだからだ。労働は生活費を獲得する手段で終わらずに、人間らしく生きるための条件である。五時に雇われた人は労働が人間に必要不可欠な恵みであることを肝に命じて知った人と言えるだろう。

だが私は望む(8-16節)

夕方になって、賃金が支払われることになる。最初に支払いを受けたのは五時に雇われた「最後に来た者」だったが、彼らは予想とは異なり一デナリオンを手にした。それを見た「最初に来た者」が「もつと多くもらえる」と期待したのはもつともなことだが、手にした賃金は約束通りの一デナリオンだった。彼らはなぜ「同じ扱い」なのだと不平をつぶやく。主人はその「一人」を呼んで、「友よ」と呼びかけ、「あなたに不当なことではない」(直訳「あなたに不正義をしていない」)と述べてから、最後の者にも同じように支払って「やりたいのだ」(直訳「だが私は望む」)と説き聞かせる。

主人にとつての「正義」は、労働量に応じた賃金ではなく、最後の者をも同じように扱うことにある。もちろん、これは人間社会にそのままあてはめるべき規範として語られたのではなく、神がどのような方を教えるためのたとえである。ねたみのために「目が悪く」なった者は(15節の「語句の解説」を参照)、神からの恵みを見落とすことになった。

この福音のまとめ

人間社会に通用する原理がそのまま神の行動原理となるとは限らない。「気前のよい」神は、ご自分のものを用いて、最後の者をも同じように扱う方である。神の義は人間が考える正義とは違っている。フアリサイ派は、どれほど多く掟を守ったかによって救いを考えたが、神は掟を守れなかった「罪人」をも同じように救いに招いている。